

第2節 地形、土地利用を考慮した農業地域区分

補節 花卉栽培および酪農の歴史と現状

a 花卉栽培

b 酪農

Ⅲ む す び

本論で中心は地形区分と統計を利用した農業地域区分である。この2つの作業を通して、この地域の地域性をとらえることを目的とした。わずか2つの町が詳しく農業地域区分ができたのは、この地域が海岸地帯から山間地帯までの農業を含んでいるからである。すなわち地形の単位がこまかく、気温の地域差、地形の地域差がそれぞれ微妙に異なり、それに交通の便利さ、歴史等が加わり、かくも種々な作物が栽培され家畜が飼養されている。恵まれた自然条件、京浜に近いという地理的有利性によってはやくから商品作物が導入されそれが各農家にゆきわたっているという点では西日本の農業地域であるといえる。地理的位置は房総半島の南東端にあり、都市の影響も直接には及んでこない。日本の一般の地方と同様に都市に人口が流出し、人口の減少がみられるが、農業に於ては、主要労働力が残っており、兼業に出る場合もこの地域内で働いている。明治、大正、昭和と時を経て徐々に変化し先進的な農業地帯となったが現在においては停滞的であり近郊農村のような急激な変化がないのもこの地域が半島の先端近くに位置し、都市とある程度隔離しているからである。

黒部川扇状地の地理学的考察

— 黒部川右岸地域に関して —

鍛 治 良 子

調査地域は、富山県の東部に位置し、水稲単作地帯となっている。郷里であること、農業に興味を持っていたことにより、本地域を選んだのであるが、調査は、特に農業に関して、他の地域との比較、本地域での相違と最近の変化を捕えることを目的とした。

第一章で、自然・人文両面から、地域を概説し、第二章で、空中写真、地形図・ボーリングにより分類した地形についての細説、第三章で、本地域の農業を土地利用と経営面から考察し、第四章でまとめとした。

本地形は、大きく高位台地・低位台地・現扇状地の3つに分けられる。台地はいずれも、かなり開析された隆起扇状地であるが、高度の高い面程、傾斜が急である。高位台地では、第三紀層を不

整合におおむね礫層の上に、火山灰層が認められるが、この火山灰層は、高位台地のみにある。低位台地の中で、最も広い舟見野面（Ⅱ面）は、西側を侵蝕崖により限られている。そして、北に傾斜して、窪田付近で、現扇状地下に没する。現扇状地のうち、空中写真の判読により、明色部を旧河道として分類した。ボーリングの結果、旧河道では、周囲よりも、表土が非常に薄くなっている。

以上の地形と土地利用の間には、集落立地上の関係がみられるが、農業土地利用からは特に目立った関係が認められない。高位台地に畑が多いが、他の地形面では、農地は、ほとんど全部が水田化されている。

最近10年間の田の利用形態をみると、二毛作田の減少が著しいが、これはレンゲ栽培面積の減少によるものである。

換金作物としては、水稻以外に、チューリップ、葉たばこ、すいか等があるが、現在のところ、あまり重要ではない。従って、典型的な水稻単作地帯となっている。

経営規模は、他の単作地帯に比して少なく農業所得も多いとはいえない。そのため、昔から、農閑期の出稼の多い地域であった。

一方、農業技術の改良・進歩による、農業生産性の向上が、農業所得の増大をもたらし、多少の資本蓄積が行われて、農機具（特に耕耨機に関して取り扱った。）が導入されるようになった。導入の仕方は、共有から個人所有へと変化し、今日では非常に高い普及率を示している。しかし、これは十分な資本の蓄積によるものではない。農機具の導入によって生じた牛馬の減少を補い、余剰労働力を消化するための乳用牛その他の家畜の導入は、本地域では顕著ではない。

以上述べた条件の下で、しかも農村への貨幣経済の浸透に影響されて、兼業化は急速に進められてきた。最近では兼業農家率は非常に高くなっている。しかし、その内容は、季節出稼、日雇が最も多く、変化がみられない。これは、本地域の地域性（近くに労働力の消費地が少ないこと。機械化されたとはいえ農繁期に労働力需要が集中する水稻単作地帯であること）を反映している。

本地域は、資源、位置に恵まれず、工業の発展は望めないであろう。

現在、水稻を主体とし、農作業の省力化、チューリップと家畜の導入をおりこんだ農業構造改善計画が実施されているが、どのような成果を示すか興味深いところである。

中津原及び津川段丘地域の地理学的考察

川 島 明 子

調査地域は、神奈川県の中央よりやや北西の、平地が関東山地へ移行するところに位置し、行政